

巻頭言 「委託」

宇野 元

きょうは先週と反対の側へ。最寄りの駅で、ホームに下りる階段を急ぎながら、乗車する側を間違えないよう、細心の注意を払いました。うっかり行き先が反対の電車に乗ったら大変。時間に余裕をみてはいるものの、迎えてくれる人々を心配させることになるでしょうから。今振り返ると、おっちょこちょいの私がミスをしなかったのは、ありふれた奇跡であったと思います。

そんなふうに、おもに埼玉、千葉、東京の教会や伝道所で説教奉仕に与っていた時期、乗り換えの待ち時間などを用いて、カール・バルトの言葉を心にとめたのを思い出します。冬の寒い早朝には、わずかに日が当たるところを求めて。また底冷えのする地下鉄駅構内で足踏みしながら。いつものやりかたで懐から言葉を書き付けた紙を取りだして。

バルトが 50 歳のときの言葉です。ドイツの大学で神学を教えていた彼は、前年の 1935 年、ヒトラーへの不服従のゆえに働き場を失い、スイスに帰国していました。ライン河畔に骨を埋めるつもりでいたのが、儂い夢に終わる挫折を味わっています。けれども、誕生の地バーゼルを拠点にして、あらたな歩みをはじめていました。彼は自分の年齢を重ねて書いています。

ひとえに、次のことが促されているのかもしれない。すなわち、考えぶかく急ぐように。いくらか穏やかに、しかし粘り強く仕事に励むように……。短い人生の時を贈りものとして受けるとともに、なにかしらの委託を戴いているか、戴いている委託を理解しているか、そして戴いている委託を、神の無償の恵みのしるしとして、感謝し受け入れているか、いま、それが明確になる時期を迎えているにちがいない。

現在の危機のなかで、だれもが命の値打ちをおぼえさせられています。また、与えられている人生の意味について考える時を、多く与えられているでしょう。ともに思いを寄せたいものです。世にある人生の時において、私たち一人一人に似合った、感謝して受けるに値する委託が与えられていることを。それは何かをたずね、知る者とされたい、あるいは、知り得た委託を受けとめ直して、心あらたに行なう者とされたい。